



貝澤 守
Mamoru
Kaizawa

<略歴>

- 1965 平取町二風谷に生まれる
- 1982 北海道立富川高等学校卒業
- 1983 苫小牧職業訓練校電気機器科卒業
- 1983 札幌市 関光電設株式会社入社
- 1985 貝澤民芸勤務
現在、貝澤民芸店主

<受賞歴>

- ・北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞（北海道教育長賞）（1989）
- ・北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞（北海道議会議長賞）（1999）
- ・アイヌ文化振興・研究推進機構（現アイヌ民族文化財団）
アイヌ工芸作品コンテスト 奨励賞（2008、2009、2011）
- ・北海道アイヌ伝統工芸展 優秀賞（2010）
- ・国土緑化推進機構のコンクール 森の伝承・文化部門
「森の名手・名人」部門受賞（2010）

“僕はくるみが好きでよく彫りますけど、かつらの木とかもよく使います。くるみはすごい刃ざわりが良く彫りやすいかつらとかに比べると、ウロコとかももげたりしない、彫りやすい木です”

“僕は、イタ（お盆）とかは小さい頃から…中学生くらいだとやったことある。こういう形になったものに彫らせて貰ったっていう。文様をね。当時そんなに、お盆っていうよりは壁掛けとかそういったものを学校の工作で作ったり、夏休みの工作とかで作ったことはありますけどね”

（Q 木彫はお父さまのを見ながら覚えた？）
“そういうわけではなくて、その頃亡くなってたんでね。弟子の方とか、近所の職人の見よう見まねとか、元からこの店にあったものを参考にしながら自分なりの彫り物をやってきましたけどね。あんまり手ほどきを受けてというわけではなくて”

（Q 文様は何か参考にしたことは？）

“参考といえますか、この地域に昔から伝わっている文様が基本なんでね。その流れがあちこちに出てるとは思うんですけど、その中でも文様の配置で自分なりのものをと思ってやっています”

（Q お母さまの「いつまで経っても勉強だ」という言葉についてどう思うか？）

“その通りかなと思いますね。あの歳になって色々頑張ってるのは頭下がりますね。ちょっと真似できないかなと思ってますけど”

“二風谷のイタが伝統的工芸品の指定を受けてから この地域お盆を彫る機会が増えていると思いますね。この技術をね、将来に渡って伝えていければいいかなという考えはありますよ”

“色々試行錯誤しながら なんとなく自分の文様を作ってきて、色々彫っていく中でこれ失敗だったなという場面もありますけど、自分らしさを追求しながら彫っていくのかなとやっています”

わざ
技

Hands and Hearts
vol.3





堀 悦子
Hori
Etsuko

<略歴>

- 1953 浦河町に生まれる。母と共に民芸品店を営みながらアイヌの手仕事を覚え、キナ織の敷物を作り札幌の食堂に卸していた
- 1979 浦河ウタリ保存会（現浦河アイヌ文化保存会）に入会
ウポポ、リセを習得。保存会では副会長をつとめ、ウポポ、リセなどの指導を行い後継者の育成に尽力。またカムイノミやイチャルパ等の供物、アイヌ料理を主導し儀式を支えている
- 現在まで浦河町民芸術祭をはじめ、道内だけでなく道外、海外の交流にも参加し、アイヌ文化の伝承、保存発展に努めてきた
- 1996 同年から開始した日高東部4保存会料理講習会で長年講師を務める浦河町郷土博物館主催の「アイヌ文化セミナー」で講師
- 2009 同年から浦河町堺町生活館のサロニ 教室で講師を務め、多くの受講生にその技術を伝えている プ

<受賞歴>

- ・第25回北海道アイヌ民芸品コンクール伝統工芸品部門ウタリ協会理事長賞受賞（1992）
- ・第27回北海道アイヌ民芸品コンクール伝統工芸品部門かたる賞受賞（1994）
- ・第28回、29回北海道アイヌ民芸品コンクール伝統工芸品部門奨励賞受賞（1995）
- ・第35回、36回北海道アイヌ民芸品コンクール一般工芸品部門奨励賞受賞（2002）
- ・第37回北海道アイヌ民芸品コンクール伝統工芸品部門奨励賞受賞（2004）
- ・アイヌ文化振興・研究推進機構（現アイヌ民族文化財団）アイヌ工芸作品コンテスト奨励賞受賞（2007）、入選（2010）、最優秀賞受賞（2012）
- ・アイヌ文化振興・研究推進機構 アイヌ文化奨励賞受賞（2015）
- ・浦河町文化協会賞受賞（2017）

“このカエカ（糸より）が本当に基本ですよ。アイヌの仕事の基本はカエカをするっていうことですよ。後輩っていうか後継者に教えるっていうのはやっぱり木の皮をカエカしてやることを教えてますね。本物で”

“ああ、いい色に染まってる。真っ黒だ、よかったよかった。すごいすごい。イイイライケレ、イイイライケレ。こんなにいい色に染まったときキレイなんですよ”
“（ごさ編みは）ものすごい手間がかかります。やっぱり楽しみながらやらないと、焦ってほできない仕事ですね。カエカしたら何を作ろうかなって考えながら楽しみながらやっていますね。だからこういう風にやっていると時間がおっくうじゃない。楽しいんです。だからそういう気持ち。習いに行って無理くり覚えたことじゃないので、こうやってやっていると自分にとって幸せだなみたいな、そういう気持ちになって”

“こうやってずっと仕事やっていると飽きないんですよ。ずっと楽しく、ずっとやっているとられるっていうか。いろんな事やっているので嫌じゃないんですよ。好きなんですよ やっぱり”

“母のすぐそばにいて、母と一緒に畑仕事をしたり、山に行ったり川に行ったり海に手伝いに行ったり、いろいろそういう風に一緒に過ごして、そうやって一緒にいたから何でも覚えられたんだよね”

(Q 母・遠山サキさんの印象に残る言葉は?)
“それは感謝の気持ち、感謝。とにかく自然に自分達も生かされてるんだっていう自然を敬う心をずっと持ち続けてましたね。子供達にもそれを伝えていけたらなと思います”



鈴木 紀美代
Kimiyo
Suzuki

<略歴>

- 1947 標茶町に生まれる
- 1971 父、秋辺福太郎のムックリ製作を手伝い始める
- 1988 ムックリ製作者として独立
- 1995 竹工芸科職業訓練指導員（アドバイザー）の資格取得
- 2002 第4回国際口琴大会（ノルウェー）参加
- 2006 第5回国際口琴大会（オランダ）参加
- 2014 第8回国際口琴大会（ドイツ）参加
アイヌ文化フェスティバル鹿児島会場 出演

<受賞歴>

- ・北海道ムックリ演奏大会優勝（2001）
- ・第7回国際口琴大会（ロシア/サハ）非金属口琴部門最優秀賞受賞

“ムックリ製作、時間ある時はほとんど毎日やっています。
できる時は朝5時半からやっています”

(Q 作業が上手いかわからない時は?)
“そりゃあります。竹の質にもよるのすつといくのと、なかなかいってくれないのと”

“作業は3時間、4時間座りっぱなし。マキリを持つ右手も、ムックリを削る作業でずっと力を入れているので、握りこぶしができないぐらい手が変形してしまいました”

“ムックリ100本だったら30本ぐらいダメです。だから何度もやめようと思ったね”

(Q やめたいと思っても続けている理由は?)
“自分が結婚してから生活のための足しにしようと思って、お手伝いしていたんです。それからずっとやるようになって外国に行くと、少数民族のいろんな楽器があるのに驚かされて、それでムックリが大好きになった”

“江戸時代にすごいムックリが流行って、政府が反対したってことは聞いたことがあります。その話はショックだったね。そのときから流行っていたら、ムックリをみんな分かっていたのになって”

“私は子どもの時から親のムックリ作りの手伝いをしていて、本格的に20歳頃ムックリ作りをやりだしたんです。音を出すのが難しくて、父親に聞いたら「ムックリに教えてもらえ」って”

(Q お父さんはどんな方でしたか?)
“踊りなんかすごい尊敬していた。踊るときの弓の舞とか剣の舞とか、足がしっかりと地について、父の踊りはすごいかったよかったです。あれだけはもう、焼き付いて残っています”

(Q お父さんはムックリも上手だった?)
“上手でした。音も良かったです。それは残ってないですよ。録っておけばよかったなと思って。”

“やっぱり作る方がいいです。作る方が。鳴らすのはやっぱり難しいかな”